

「学び」のあり方と生きること

- ある教育実践における子ども達の様子からの考察 -

立命館大学大学院
 応用人間科学研究科
 臨床心理学領域
 権 絵理加

今日の日本では競争教育の流れがあり、一方では態度主義的な学力評価も起こっている。この状況の中で、学校は子どもたちにとって受験戦争や大人の望む姿になるための場となっていないだろうか。特に子ども達が「主体的に『なぜ?』と問う」機会と「対人関係を育む」機会を失っているのではないかと懸念される。本研究においては「学び」とは、認知的な側面だけでなく心理発達の側面を含んだ人格形成全体に関わることであるという立場に立ち、全人格の「育ち」を可能にする「学び」とはどういうものか、を子どもの視点から研究した。具体的には、根本の意味を考えることを目的とした数学の授業の観察、子どもへのアンケートとインタビューを経て、授業のどんな要素を子どもがどう感じているか、授業での「学び」が、その人の「生」にどう関わっていくのか、の二点について考えた。調査では、こうした授業に子どもが何かを感じる要素を調べ、その結果“教師の態度や教え方の工夫”、“具体的事物から抽象概念への段階的思考”、“「なぜ?」を考えること”、の3点が効果を生むことがわかった。“「なぜ?」を考えること”は、慣れていない子どもには戸惑いや難しさも感じさせた。調査では第一に、上記の3点に“生徒同士の交流を通した学び合い”を加えた4点が、継続的にこのような授業を受けている子どもにはどう感じられるかを考えた。結果、理解の深まりや楽しさ、興味深さが引き出される一方で、授業の自由度が高いことによる課題も感じられていることがわかった。第二に、「主体的な学び」がいつ引き出され、どのような効果を生むのかを検討した結果、生徒が主体的に学ぶきっかけは、問いの<興味深さ><解明することによる理解の容易さ><考えることの楽しさ>の3つであった。さらにこの3点を感じる理由として、“教師の態度や工夫”、“具体的事物から抽象概念への段階的思考”、“生徒同士の交流を通した学び”があると考えた。第三に授業内での「学び合い」は対人関係を良くし、相談しあえる雰囲気を作ることが示唆された。調査では、学校生活全体の中で主体性や学び合いを重視している学校では、主体的な学びがその人の生き方にどう関わるのかと、生徒同士の学び合いが普段の対人関係にどうつながるか、を考えた。結果、主体的な学びは、集団あるいは個人の自己形成を助ける可能性があることが分かった。また、主体的に自らを表現することで、自身の判断に自信を持って生きることにつながることが考えられた。生徒同士の学び合いと対人関係では、授業の中で良い関係ができて、生活場面になると嫌われたくないから遠慮してしまうということがあり、この問題の奥深さが浮き彫りとなった。以上のことから、人格形成のための学びは心理発達の側面からも非常に重要で、そのためには社会全体が「学び」について考えていくことが必要である。